

## 論文

## 環境保全型イベントが地域社会に及ぼす影響 —守山市の「守山ほたるパーク&ウォーク」のアンケート調査より—

柏尾 珠紀

環境総合研究センター客員研究員

### Effects of an Environmental Local Event on a Local Society A Case from Moriyama, Shiga prefecture, Japan

Tamaki KASHIO

Visiting Researcher, Research Center for Environment and Sustainability

It is quite common to see local groups organize events. These events seem to have considerable effects on the lives of people, but few studies shed light on them. This study examines the social effects of the Firefly Festival, which has been held annually in Moriyama City, Shiga Prefecture, in which people view fireflies on the sides of river such as Meta River. The analysis is based on data collected over three years from 2015 to 2017. The results of the study suggest that: i) the event helped the creation of a social order for tourists to view fireflies without disturbing the lives of local people, ii) establishment of the above-mentioned order significantly contributed to the preservation of the water environment where fireflies live, and iii) the work to organize the events with the participation of many people created a community network that could form a basis for other social activities.

**Keywords:** local environmental event, firefly, water environment

#### 1. はじめに

環境保全にまつわる地域行事は、恒例化するものもある一方で、消滅するものもある。そのような地域行事は公共性をともなう行事として「イベント」と表されることが多く、いずれも相当数の人々が時間と空間を共有することで目的を達成することを目標にするものである<sup>1)</sup>。梶谷(2015)は、社会工学的視座から、全国で数多開催されるこのようなイベントについて分類をおこなったうえで、バブル期以降においてテーマや形態、受容が変化したことを指摘している。具体的には、伝統文化や歴史、自然、動植

物がテーマのイベントから食や産業、地域間交流などというテーマのイベントへのシフトがみられ、現地体験や散策という行動型のイベントが増加したというのである。

他方で、イベントそのものではなく、まち作り活動や地域の伝統的イベントに参加する主体について、運動論的な視座から検討したものも多い。足立(2010)は、伝統的な祭りと開発反対運動に参加する主体の連動について考察し、生活者のリアリティを明らかにした。また、イベントを通してまちづくりが実践されたことを検証した事例紹介や研究(田村1999、森岡他2008)も枚挙にいとまがない。

これらはいずれも目的を達成するために諸主体がイベントと如何に関わりをもったかを検討したものである。

だが、イベントの趣旨が浸透しているかを検証し、継続開催されてきた地域イベントが参加者にどのような意識変化をもたらすかについて、追跡して検証されることはあまりない。そうしたことをふまえ、本論では、長年継続して開催されている環境保全の啓発を兼ねた地域イベントを取り上げて、開催趣旨の伝播と、長期開催のイベントがもたらす効果について検討することを試みる。

取り上げるのは滋賀県守山市で14回にわたり開催されている環境保全啓発型のイベント「守山ほたるパーク&ウォーク」である。守山市のイベントを取り上げるのは以下のような理由からである。琵琶湖岸から内陸部にわたる市域を有する守山市は、1970年の市制発足以来、自然と調和した暮らしを指向してまちづくりを推進してきた歴史がある。この過程では、民官がともに地域のシンボルであったゲンジボタルを都市的地域において再生させた経験もある<sup>2)</sup>。

市内には環境NPOや環境ボランティア団体が多数あり、琵琶湖岸から内陸部にわたる広範囲において各様の取り組みをおこなっている。多くの環境保全を謳った啓発型のイベントがあるなかでも、守山ほたるパーク&ウォークは、都市的地域でホタルの飛翔を觀賞するための緩やかなルールを構築することや、自然資源を保全することの大切さを伝えることを目的に始められた。地域の環境再生の経緯については柏尾(2013)、当イベントの実行委員会組織や地域活動については柏尾(2015)に詳しいため割愛するが、近年では、当イベントの観光への可能性も模索されており、目的は多様化しつつある。だが、実行委員会組織がNPOを中心とした期間限定的な組織であることから、イベントの効果とその有用性は十分に議論されてこなかった。

そこで、現時点における来場者像を明らかにすると同時に、当イベントが開始された当初の理念を浸透させることに成功しているのか、そして、長期にわたる開催がどのような効果をもたらしたのかを検討するために、2015年から2017年にかけて来場者へのアンケート調査と聞き取り調査を実施した<sup>3)</sup>。3年間の調査という限定性はあるが、一定の傾向や特徴を確定することは可能であると考えた。

以下、次のようにすすめることにする。次章では、調査の概要および主要な調査結果を紹介し、イベントの来場者像を明らかにする。第3章ではイベントの理念の浸透と波及効果を考え、意図せざる効果や負の機能を明らかにして、最後に全体をまとめよう。

## 2. 調査の概要と主な調査結果

### 2.1 アンケート調査の概要

調査は同イベント開催期間中、駅前からホタル河川を経由してホタルの森資料館に無料バスが運行する土曜日、日曜日<sup>4)</sup>に実施した。調査地点は、ホタルの生態などの展示をおこなう駅近くの臨時案内所とホタルの森資料館の2か所である。この2か所は、公共交通機関を利用する来場者と自家用車を利用する来場者のどちらもが多く立ち寄る場所であるため、この両地点を訪問した来場者を調査対象とした。調査項目はイベントの来場者像を明らかにするための属性に関する質問として、性別、年齢階層、居住地、来場回数、同伴者、来場手段やイベント情報の入手方法について質問した。さらに、ホタルの飛翔を見たことによる意識の変化や、観光の可能性を知るために以下のような設問を設定した。

- 守山ほたるパーク&ウォークを通してホタルがすめる水辺に関心を持ったか
- ホタルを保全するために実行が可能な取り組みを選択する(複数回答)
  - ・河川にゴミを捨てない
  - ・環境にやさしい洗剤を選ぶ
  - ・河川の清掃活動に参加する
  - ・ホタルを保護する活動に参加する
  - ・環境保護ボランティア団体の活動に参加する
  - ・その他
  - ・取り組めるものはない
- ホタルを見て感じたこと(複数回答)
  - ・癒された、安らぎをもらった
  - ・懐かしかった
  - ・自然を大事にしたいと思った
  - ・自分の家の近くでも飛んでほしいと思った
  - ・これからもこの時期に毎年見たいと思った
  - ・その他
- 改善されればよいと思った点(複数回答)
  - ・たくさんホタルが飛んでほしい
  - ・ホタルを見る休憩所がほしい
  - ・記念になるお土産がほしい
  - ・遅くまで飲食店が開いているといい
  - ・その他
- このイベントでどれくらいのお金を使ったかあるいは支出予定か

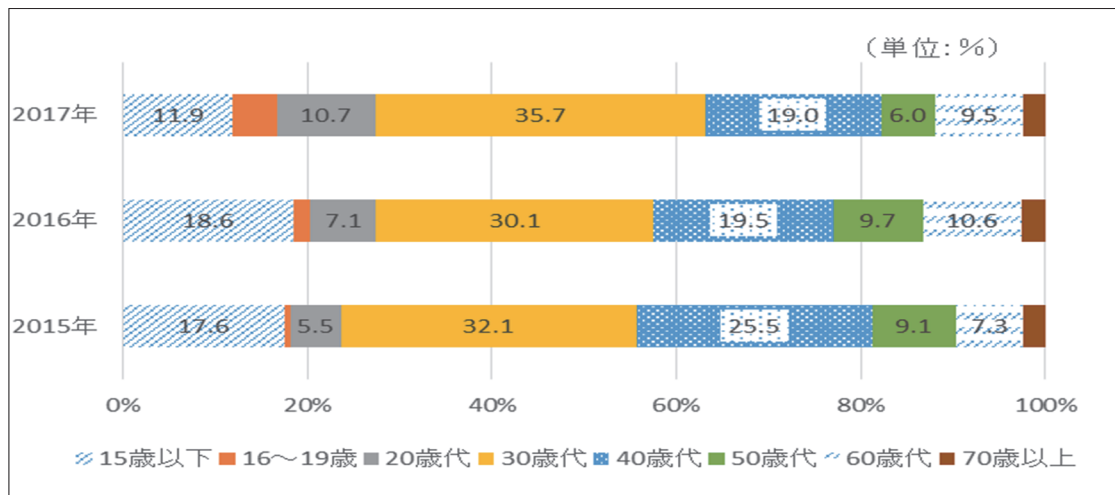
## 2.2 主な調査結果

### (1) 回答者の属性からみた来場者像

アンケート調査の結果からイベントの来場者像を明らかにしていこう。アンケートの回答者は、2015年では男性73名、女性92名の計165名、2016年では男性29名、女性84名の計113名、2017年が男性27名、女性57名の84名であり、3年間の合計回答者は362名であった。

アンケート調査の回答者を男女別に見ると、各年でばらつきはあるものの、平均すると女性が50%以上、男性が45%程度を占めていた。後述するが、これは家族連れの来場者や女性同士の来場者が多かったこともあり、質問用紙の記入者が女性であったことを反映していると考えられた。

図1で回答者の年齢層を見ておこう。来場者は30歳代が一番多く、次いで40歳代が多いことがわかった。また、15歳以下の小中学校の生徒の来場も比較的多かった。これは、家族連れが多いこともあるが、同市が力を入れている郷土教育や環境学習と関係があると考えられた。市内の幼稚園ではホタルの幼虫やその餌であるカワニナを飼育することや、ホタルの幼虫を河川に放流する行事をおこなうこともある。また、中学校の科学部では伝統的にホタルの学習をおこなっており、イベント開催中は科学部が展示もおこなう。そのようなこともあり子どもたちのホタルへの関心が高いのである。しかし、16歳から19歳の高校生や大学生世代はほとんど来場していないこともわかった。では、来場者はどこから訪問しているのだろうか。居住地についても見ていこう。



出所) アンケート調査より筆者作成。

図1 回答者の年齢層（2015年から2017年の各年について）

来場者の居住地を守山市内、滋賀県内、滋賀県外で見ると、3年間の平均で市内在住者が50.4%、県内在住者が34.6%、海外を含めた県外在住者が15.2%となっていた。ここからもわかるように、来場者の約85%が県内在住者である。年度別では多少のばらつきはあるが、市内在住者が約40%から55%を占めていた。また、隣の栗東市や草津市、大津市からの訪問は多いが、湖東や湖北からの訪問はなかった。これらの地域は地元でホタルの飛翔が観賞できるからということもあるだろうが、情報が届いていない可能性も考えられた。

県外からの来場者は毎年全体の15%ほどが京都、大阪からの訪問客であり、奈良や神戸からも数名あった。2016

年には多くの外国人が来場したが、その理由は、旅行者同士が情報を交換するインターネットサイトにこのイベントが取り上げられたことであった。聞き取りの際にも、多くの海外からの旅行者はインターネット上の関連するサイトや、ユーチューブを見て訪問したと回答した。

次に、同伴者の状況を記したものが表1である。ここからは来場者の74.9%が家族連れであることがわかる。参与観察では、家族連れの場合には多くが乳幼児を連れた若い夫婦であったが、高齢者を含めた多世代家族もかなり多く、そのメンバー構成はさまざまであった。また、女性同士や男女混合の高齢者のグループの訪問も散見された一方で、一人で来場した人も例年一定程度存在していた。このなか

には研究や学習を目的とした研究者や学生も含まれていた。以上のことから、来場者の多くは、市内や近隣市から

訪問する子育て世代の30歳代40歳代を中心とした家族連れであるということが明らかになった。

表1 来場者の同伴者について

	一人	家族連れ	友人	学校等の団体	その他	総計
人数(人)	25	271	55	5	6	362
構成比(%)	6.9	74.9	15.2	1.4	1.7	100

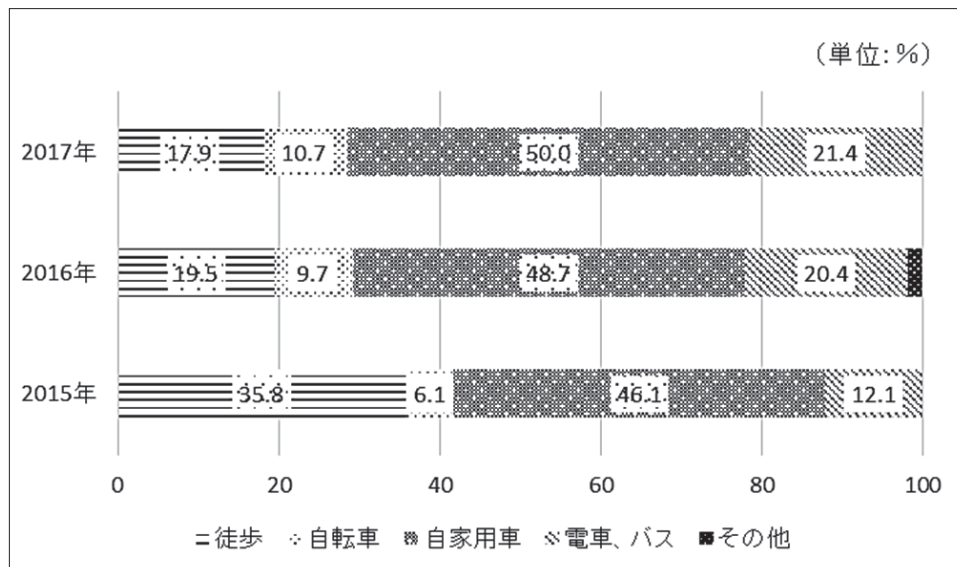
出所) アンケート調査より筆者作成。

注) 2015年から2017年の3年間の合計値である。

(2) 来場に関する実態

来場者の会場までの交通手段を見たものが、図2である。来場の際には毎年自家用車の利用が約半数を占めているが、これは夜間であることや、幼児を連れての大人数の家族連れであることが背景にあると考えられる。また、イベントの期間中はホテルの森資料館に隣接する運動公園の駐車

場が開放され、そこからシャトルバスがホテルの飛翔ポイントを順に運行することが周知される。このことも自家用車の利用者が多い理由であろう。自家用車の次に多いのは徒歩での来場であり、自転車を利用した来場者も一定程度存在していた。



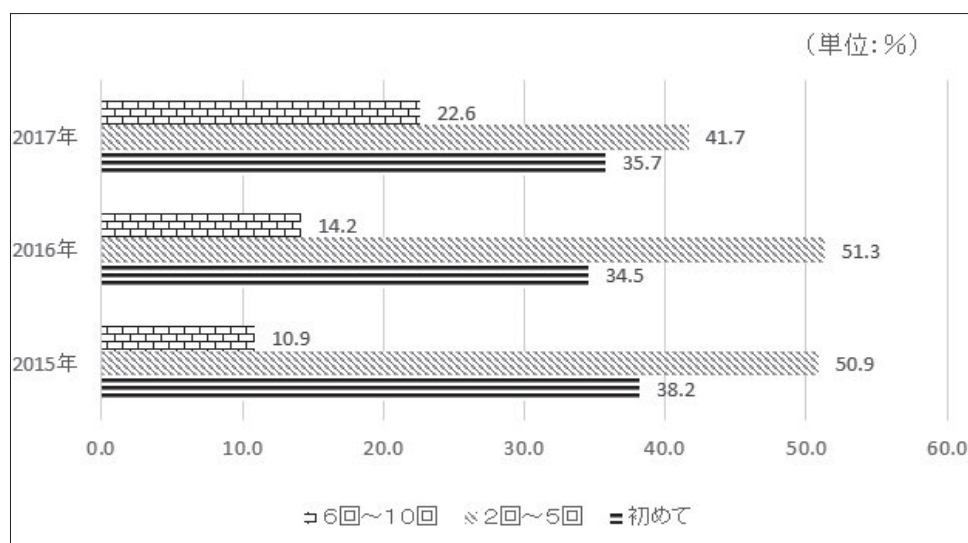
出所) アンケート調査より筆者作成。

図2 来場者の交通手段 (2015年から2017年について)

注目したいのが、2015年から2016年にかけての電車やバス利用者の変化である。2016年から運動公園の駐車場と駅前を往復するシャトルバスが無料化され、利用者が激増したことが如実に表れている。協力金として支払っていたバス代が無料になったという情報が2016年には十分広がったことがわかる。これにより、徒歩での訪問者がバスを利用してホテルの森資料館まで足を延ばすことができる

ようになるとともに、鉄道利用者や駅周辺に居住する人が夜間にホテルの森資料館やホテル河川を訪問するようになったと考えられる。

次に回答者の来場回数について見ていこう。図3は回答者の来場回数を年度ごとに構成比であらわしたものである。



出所) アンケート調査より筆者作成。

図3 来場者の来場回数 (2015年から2017年について)

図3を見てみると、毎年約4割弱は初めてこのイベントを訪問している来場者であることや、ほぼ半数は2回から5回訪問しているリピーターであることがわかった。来場者も年を経るとともに増加しており、6回以上という固定的なりピーター層も着実に増加している。また、イベントの日程が毎年ホタルの生育具合に合わせて変化するにもかかわらず、情報を入手して来場する固定的なりピーターが存在していることがわかる。そういったリピーターが同伴者として連れてくる人や、市内に新たに転入してきた家族連れが「初めて」の層には含まれているのであろう。

イベントの来場者の多くは、イベント情報をポスターやチラシから入手していた。こうした目に触れる情報と同様に多かったのが、インターネットを含めた人を介した口コミ情報である。マスメディアであるテレビ、ラジオ、新聞等でも広報しているが、メディアの影響はほとんどなかったことも明らかになった。また、「偶然通りかかった」等の全く情報を持たなかった来場者も毎年存在しており、それは都市的地域であり通勤や通学に利用するJR駅前周辺で開催されていることが背景にあると考えられた。

### (3) ホタルが生息する河川環境への関心

ホタルの飛翔を觀賞するイベントに参加した人々の環境意識やその変化について考察していこう。ホタルの飛翔を見にきた来場者のうち、アンケート回答者の約95%がホタルを見た経験を保有していた。そして、そのうちの約75%が、幼稚園から小学生という子ども時代に初めてホタル

を見た経験を持っていた。つまり、イベントにはホタルを見たことがある人が多く来場していたのである。他方で、大人になってから初めて見た者も20%ほど存在しており、このイベントで初めてホタルを見たという若い男性が多いこともわかった。同市に転居してきて初めてホタルの飛翔を見たと答えた人が多かったことは興味深いことでもある。

ホタルの飛翔を見ることで環境への意識が変化したかどうかについて見てみると、「守山ほたるパーク&ウォークを通してホタルがすすめる水辺に関心を持ちましたか」という質問に対して、3年間を平均すると約89%の回答者が関心を持ったと回答した。その理由として自由記入欄に記載されたなかで一番多かったのは、河川や水辺と生き物の関係に関するものであった。実際のコメントを以下に抜粋しておこう。

- ・きれいな水、川、水辺がないとホタルがすめないことがよくわかった。
- ・展示でホタルの一生について学んで初めてホタルが成長できる水辺が必要と知った。
- ・ホタルがすむためにはきれいな水辺の環境が必要だとあらためて理解した。
- ・シャトルバスのなかでホタルの生態について解説してもらったので興味をもった。
- ・きれいなホタルを見て子どもがとても喜んでいるから。
- ・宅地造成で家の近くからどんどんいなくなっているから。

- ・水がきれいになればホタルが帰ってくるのがわかったから。
- ・昔はたくさん飛んでいたのになくなった。また、戻ってきたから今度は大事にしたいと思ったから。

これらのコメントは男性の場合、30歳代、40歳代という若い世代からの回答が比較的多かったが、女性の場合は全年齢層にわたっていた。コメントからはイベントが環境意識の再編に作用していることが明らかだった。来場者は、

実際に自然のなかを飛翔するホタルを觀賞し、イベントの展示物やボランティアの解説を聞いてホタルの生態や生息環境を理解し、そのことによって地域の自然環境への関心や興味をもったと述べていたからである。ホタルを觀賞する当イベントそのものが、環境意識を再編させるひとつの装置であるということをお話している。

それでは、人々はホタルの飛翔を見てどのような感情を持ったのだろうか。表2からは来場者の目的や感情を垣間見ることができる。

表2 ホタルの飛翔を見た感想について

(単位：%)

	癒された・安らぎをもらった	懐かしかった	自然を大切にしたいと思った	自分の家の近くでも飛んでほしいと思った	これからもこの時期に毎年見たいと思った	その他
男性	27.7	15.9	24.3	14.2	16.9	1.0
女性	26.5	13.2	23.1	15.9	19.9	1.4

出所) アンケート調査より筆者作成。

注) 2015年から2017年の合計値である。

感想は男女別や年齢別、在住地別にみても大きな差異がなく、「癒された・安らぎをもらった」と多くの人を感じており、来場者がホタルの飛翔を見ることで安らぎや癒しを求めていることがわかる。また、ホタルを見たことで「自然を大切にしたいと思う」と感情が展開している点も興味深い。「これからもこの時期に毎年見たいと思った」を選択した来場者は年齢層にあまり特徴はなく、「懐かしかった」「自分の家の近くでも飛んでほしいと思った」という感想は、市内在住者の高齢者が比較的多く選択していた。

市内ではかつてはどこにでもホタルが乱舞していたということもあり、市内在住者にはホタルの飛翔をかつてのように復活させたいとの思いがあることがうかがえた。

#### (4) 取り組み可能な環境保全活動

しかし、意識の再編と行動との間にはやはり大きな隔た

りがあることも明らかである。ホタルの飛翔をみて安らぎの感情を持ち、またあるいは、河川環境の重要性に意識が及んだ来場者が、ホタルを保全するために行動を起こすことはなかなか難しいことも事実である。

ホタルを保全するために実行が可能であると来場者が考えるとりくみでは、「川にゴミを捨てない」、「環境にやさしい洗剤を選ぶ」などの個人的に取り組みやすい項目は男女ともに多く選択されたが、「河川の清掃活動に参加する」というような具体的な活動を選択したのはその半数ほどしかいなかった。「ホタルの保護活動に参加する」という直接的な活動の選択者はさらにその半数程度であった。また、「取り組めることはない」と回答したのは女性に多く、「環境保護ボランティア団体の活動に参加する」と回答したのが男性に多いという特徴があった。

表3 ホタルを保全するために可能な取り組みについて

(単位：%)

	河川にゴミを捨てない	環境にやさしい洗剤を選ぶ	河川の清掃活動に参加する	ホタルを保護する活動に参加する	環境保護ボランティア団体の活動に参加する	取り組めるものはない
守山市内	44.8	21.7	18.5	9.5	4.9	0.6
滋賀県内	45.7	26.7	15.2	7.8	2.1	2.1
滋賀県外	44.7	23.7	13.2	7.9	6.1	3.5

出所) アンケート調査より筆者作成。

注) 2015年から2017年の合計値である。

表3で守山市内と市外の回答の違いを詳細に見ていくと、市内在住者では「環境にやさしい洗剤を選択する」の選択は少ないが、「河川の清掃活動に参加する」「ホテルを保護する活動に参加する」が多かった<sup>5)</sup>。市内では年間を通して河川清掃や河川での行事、ホテル保護活動が身近にあり、洗剤を選ぶという個人的な行為よりも、より実践的で効果が目に見える活動が定着していることが背景にあるのかもしれない。

「環境ボランティア団体の活動に参加する」が市内と県外が多かったこともおそらく同様の背景があると考えられた。この項目は男性が多く選択しており、ボランティア団体に参加して活動することに対しては、男性の方が、ハードルが低いのかもかもしれない。企業などを退職した男性が、ボランティア組織の一員として地域の環境保護活動の重要な担い手になり得る可能性は十分にあると考えられる。

#### (5) ホテルの飛翔イベントと産業振興

地域イベントの多くは、多種多様な業種や業態の主体が

関与して構成されることから、新たなビジネスチャンスを生み出す可能性があるという。環境保全啓発型の当イベントの来場者が、産業振興に寄与しているかどうかについても考えてみよう。表4は、来場者がイベントで支払った金額について構成比でみたものである。

表にあるように、約52%の来場者は500円以下しかお金を使っていなかった。既述のように、来場者は市内在住者が多く、自家用車で来場し駐車してシャトルバスに乗り乗るルールにのっとりホテルを観光する。また、イベントの開催期間中であっても、わずかな出店やコンビニ以外にはお金を支出する施設がない。県外在住者が比較的高い金額を支出しているのは交通費であった。そういうこともあり、残念ながら乗用車や徒歩で来場し無料のシャトルバスを利用する人々は、お金を支出する機会がないことが明らかになった。近隣からの来場者が多い当イベントにそれほど大きな経済効果は見られなかったのである。

表4 イベントで支出した金額

(単位：%)

支出金額	500円以下	500円 - 1000円	1000円 - 1500円	1500円 - 2000円	2000円以上	未記入	総計
来場者	51.8	21.3	7.8	5.5	6.6	6.9	100

出所) アンケート調査より筆者作成。

注) 2015年から2017年の合計値である。

また、表5は当イベントへの希望や改善点として寄せられた回答を記している。ここからわかるのは、来場者の主たる目的が、ホテルを観光することだったということであ

る。観光の促進や開発という視点から考えるならば、ホテルの観光と合わせて提供できる何かを創設することで、来場者の行動も変化する可能性はあるだろう。

表5 来場者が改善されればよいと感じた点について

(単位：%)

	たくさんホテルに飛んでほしい	遅くまで飲食店が開いているといい	記念になるお土産がほしい	ホテルをみる休憩所がほしい	その他
守山市内在住者	58.0	9.2	14.3	15.1	3.4
滋賀県内在住者	67.8	6.7	12.8	9.4	3.4
滋賀県外在住者	66.1	7.1	8.9	12.5	5.4

出所) アンケート集計より筆者作成。

注) 2015年から2017年の合計値である。

### 3. イベントの効果

#### 3.1 理念の浸透

以下では、当イベントにおける理念の達成とその効果について考えたい。これまで見てきたように、「守山ほたるパーク&ウォーク」は、守山市内在住者および近隣市の住民にとって、夜間に安心して家族で訪れることができる季

節の重要な行事として位置付けられていた。換言すれば、高齢者、若い母親や幼児といった社会的な弱者でも安心して夜間にホテルの観光を楽しむ機会を、このイベントが提供していることを意味している。

その背景には、実行員会組織によるイベント開催のシステムが構築されていることや、駅周辺の自治会がイベント

の日程に合わせて自治会主催のホタル祭りを開催すること、また、多数のボランティアが参加するだけでなく、警備員の雇用により安全への対応がなされていることなど、多面的な配慮と工夫がある。だが、イベントの効果として重要なことは、10年以上にわたり同イベントが開催されてきたことにより、地域社会の中にホタルの飛翔を觀賞するルールが浸透し、秩序づけられたことである。それにより、再開発が進む都市的地域においても環境が保全できている点である。

車を止めてシャトルバスに乗り飛翔ポイントをめぐるというルールが定着したことで、生活者の暮らしを脅かさないうということもかなり実現できているとみていいだろう。電車で来場する人々にとっても夜間にシャトルバスが運行されていることは心強いはずである。秩序化されたことにより、より多くの人々がホタルを見ることを享受でき、さらに、觀賞者によってホタルの生息環境が踏みじられるということもなく、環境の保全が達成できているのである。このように、環境保全と暮らしの豊かさの両立が成されていることが、当イベントの何よりの成果であると考えられた。

ホタルを觀賞するために足を運んだ人々は、自然のなかを飛翔するホタルを觀賞し、同時に、展示物からホタルの生態に関する知識を得たことにより、「ホタル」から「ホタルの生息環境」へと意識と視野を拡大していた。イベントに参加したことで、河川環境や水質への関心が沸き起こったことも見逃してはいけない効果である。もちろん、それが直接、河川環境やホタルの保護にまつわる活動につながるかどうかは不明である。

また、当イベントが長きにわたり開催できる背景には、日常的な河川の管理、NPOやボランティア活動の蓄積があることも忘れてはいけない点である。そのような地域社会の基盤の存在や、都市的地域においてホタルが飛翔すること自体が、地域の豊かさの指標となりうるのである。

### 3.2 波及的な機能や効果

イベントが定着してホタルを楽しむ秩序ができたことで、より多くの人々がホタルを楽しめるようになったのであるが、そこから派生した意図せざる効果についても掘り下げてみよう。

それは、当イベントに来場した子育て世代が、自らの生活環境により愛着をもつことである。同市は若い子育て世代の転入者が多いという特徴がある。若い家族連れの転入

者は、教育環境や行政サービス等をはじめ生活環境が子育てに適しているかどうかに関心がある。かれらは、口コミやインターネットからあらゆる体験者の情報を入手し、それらを参考にしていると述べた。そのような世代の発信するイベントにまつわる情報が、市の生活環境の良さをアピールしているのである。

乳児を連れたある若い夫婦は、「駅前で便利なのに自然環境がある」と語った。このイベントで生まれて初めてホタルをみたという30歳代の夫は、転居してきてからは毎年来てしていると述べた。また、妻は、イベントの期間中は夜間にママ友と幼児連れでも安心してホタル觀賞にちょっと出かけることができる環境を高く評価した。ホタルがいることはもちろんだが、女性や子どもが夜間に安心してホタル觀賞ができる体制が構築されている自然的、社会的環境は貴重である。このような情報が発信されることで、転入促進や定住促進に寄与する可能性があると考えられた。

10年以上ほぼ同じ組織構成によってイベントが開催されていることにより、地域内においては、NPOを中心とした民と官、地域組織と個人、あるいは、NPO組織とボランティアという多様なアクター間の密なネットワークが構築されている。見方を転じれば、イベントの開催をめぐりNPOが介在したことで、住民だけでも行政だけでも成し得ることができなかった現代的な地域社会秩序の構築に成功したということである。これは環境保全における地域社会と行政との関係のあり方のひとつの先駆的事例といえるだろう。地域づくりを考えるにあたり、このようなネットワークが構築されていることは強みである。地域の総合的な力量を高めるという点において、当イベントが有効に機能したことは重要な点として指摘しておく。

だが、觀賞のルールが定着し地域の活動ネットワークが構築された一方で、イベントの潜在的な負の効果も顕著になった。情報がインターネットで瞬時に拡散することで、ホタルの飛翔状況がつぶさに把握され、ホタルが盗難に遭うことも頻発し始めた。このようなことに対して対応が検討されているが、困難な課題となっている。

## 4. おわりに

本論では、守山市で14回にわたり開催されている「守山はたるパーク&ウォーク」を取り上げて、環境保全啓発型の当イベントの理念の浸透と、長期にわたり開催されているイベントがどのような効果をもたらしているのかについて、イベント来場者へのアンケートと聞き取り調査から



考察した。その結果は以下の4点に集約できる。

第一は、イベントの定着により、環境保全と暮らしの豊かさの両立が実現できたことである。夜間にホタルの飛翔を觀賞する秩序が浸透したことにより、ホタルの飛翔ポイントの近隣に暮らす生活者の日常を脅かすことも減少した。当初の理念が浸透して觀賞が秩序づけられたことで、環境保護が可能になると同時に、市外や県外から多くの人々が気軽に訪問しホタルを楽しむことが可能になったのである。

第二は、イベントが来場者の河川環境への意識を再編させるような装置を保有していた点である。ホタルの生態を学ぶ機会と、自然のなかで飛翔するホタルを見る機会がイベントによって同時に与えられることで、来場者は河川環境を保全することの重要性に気付かされていたのである。環境意識の再編に当イベントが果たした役割は大きいと考えられた。

第三は、イベントに若い子育て世代が来場することで、この世代がもつ市のイメージがよくなることである。そういった情報が拡散されることは市の広報にもなり、転入促進に貢献する可能性もあるだろう。

第四は、NPO組織を媒介に長期にわたりイベントを開催してきたことでもたらされた地域内ネットワークの存在である。市内においては、役割分担や組織間の連携にまつわるネットワークが構築されており、どのような場面でいかなる団体や組織が機能するのかがNPOを中心に認識されている。このような組織や地域社会と行政との関係のあり方は、構築しようとしてもなかなか困難である。だが、こういった連携の基盤が暮らしの豊かさを下支えしているのである。このような不可視な効果を正当に評価することは重要であり、そうすることで新しい展開を企図することが可能になるのだと考えられる。

## 主要参考文献

- 足立重和『郡上八幡伝統を生きる—地域社会の語りとりアリティ』新曜社、2010年
- 柏尾珠紀「地域史から読み解く地域の環境再生—滋賀県守山市の調査より—」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第10巻第1号、13-25、2013年
- 柏尾珠紀「都市における環境再生とその担い手像—守山市の守山ほたるパーク&ウォークの調査から—」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第12巻第1号、9-18、2015年

梶谷克彦「日本における地域イベントの時代変容に関する研究」日本感性工学会論文誌 14(3)、433-442、2015年

田村明『まちづくりの実践』岩波新書、1999年  
認定NPO法人びわこ豊穰の郷 hp <http://www.lake-biwa.net/akanoi/>

平野繁臣（監修）『イベント用語辞典』日本イベント産業振興協会、1999年

森岡清志編『地域の社会学』有斐閣アルマ、2008年  
守山市 hp <http://www.city.moriyama.lg.jp/>

## 注

- 1) 『用語辞典』日本イベント産業振興協会
- 2) 市内ではホタル河川も指定されており、2017年には環境学習都市宣言をおこなった。その他市の環境政策等については守山市 HP を参照のこと。<http://www.city.moriyama.lg.jp/kankyoseisaku/kankyogakusyutoshi.html>
- 3) アンケート調査の項目は認定NPO法人びわこ豊穰の郷と協同で作成し、その調査票で2015年から2017年の3年間調査を実施した。調査日時は週末の夜間19時から22時までの間で、対面によりアンケート票に記入してもらう方法で実施した。
- 4) 守山ほたるの森資料館は守山市民運動公園内にあり、現在は同市内に立地する認定NPO法人びわこ豊穰の郷が指定管理者として管理運営をしている施設である。
- 5) これは回答者層が30歳代40歳代という比較的若い世代が多かったことや転入者も多かったことから、かつての琵琶湖の水質改善にまつわるせっけん運動などがあまり知られていない可能性も考えられた。

